

# PAGE2010に見るハイブリッド印刷の動向

## ～各社から活発なワークフロー提案～

PAGE2010初日の開会式でJAGATの浅野健会長は、「新生グラフィックビジネスのコンセプトは、デジタルとアナログのハイブリッドにある」として、「あらゆるものがデジタルに移り変わる時代だが、デジタルだけに傾注しては、新しいサービスを生み出すことはできない。デジタルとアナログを組み合わせることが今後重要になる」と考えを述べた。

ここでは、今回のPAGEで見られたハイブリッド印刷への提案を取り上げてみる。

### ■後加工までの流れを実演

日本アグファ・ゲバルトは、インターネットによるデータ入稿・校正・承認システムである「APOGEE Portal」、JDF対応PDFワークフロー「APOGEE Prepress」で、データ入稿からプリプレス工程を支援する。

「APOGEE」の根底にある「オープン思想」の体現として、他メーカーとの信号のやり取りを進め、同一データによるハイブリッドワークフローの確立を目指す。

こうした流れでJDF対応ワークフローから、大判インクジェット、デジタル印刷機、PODなどへの出力を提案する統合ワークフローを紹介した。

今回の展示では、白インキ出力対応のワイドフォーマットUVインクジェットプリンター「Anapurna Mw」が国内初出展された。また、高速枚葉UVインクジェットプレス「M-PRESS-TIGAR」がモデルとパネルで紹介された。今後、日本の需要動向次第でリリースされる可能性がある。

日本ヒューレット・パッカーでは、「デジタルがもたらす価値」をテーマにした。drupa2008で発表したIndigoの最上位機種「HP Indigo 7000 Digital Press」を国内で初めて展示した。同機は、「HP Indigo Press5500」の2倍の生産性を達成している。展示のコンセプトは、オフセット印刷に近い品質の実現。

印刷サンプルでは、人肌の表現などが向上し注目された。

また印刷速度と生産性で、従来のオフセット印刷との損益分岐点を数千ページのレベルに押し上げることを可能にした。

「HP Indigoハイブリッドワークフローソリューション」は、既存のオフセット印刷機、またアグファ、コダック、大日本スクリーン、ハイデルベルグ等、各社JDF対応ワークフローに各ソフトウェア・モジュールを組み込むことで、スムーズに連携した展開が可能になる。

また同社が開発した「HP SmartPlanner Job Estimator」は、印刷会社の事業コストを入力することで、「HP Indigo Press」とオフセット印刷の損益分岐点を明らかにすることができる。

キヤノンマーケティングジャパンは、隣接するホリゾンと協力し、ニアラインによるデジタル印刷機との連携、JDFワークフローによる一元管理での製本加工までの流れを実演。デジタル印刷からポストプレスに求められる多品種少量生産への迅速な対応、生産性を示した。

ホリゾンは、多品種少量生産に合わせた製本システム、さらにPPF/JDFファイルを受けて自社製本機械の自動設定を可能にしたネットワークワークフローシステム「pXnet」を紹介した。

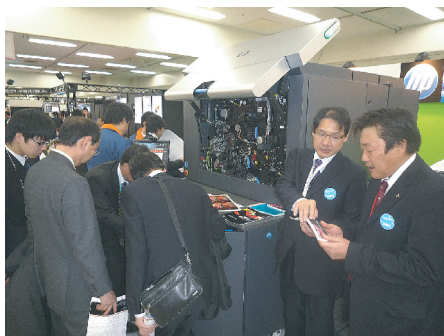
### ■各デバイスへの柔軟な対応

コダックは、日本初公開のインクジェットプリンティングヘッド「Prosper S5」を正業機械製作所の枚葉搬送機に連結し、高速バリエーション印刷の実演を行った。A4サイズ台紙の印刷をオフセット印刷で行い、住所、宛名、QRコードをDMにバリエーション印刷で処理するハイブリッド印刷を実演。毎分100メートルの搬送処理がインラインで行われ

高速に稼働するため高い生産効率が期待できる。

メディアテクノロジージャパン/大日本スクリーン製造は、「Trueflow」の新バージョンをJDFとの連携で紹介。自社ブースでは、ビジネスフィールドを広げるインクジェットPODの製品サンプルを紹介した。

ハイブリッドワークフローは、出力部数や納期などに合わせ、デバイスの面付けや主力データを最適化する柔軟性が求められる。「Trueflow SE」のPOD接続モジュールは、主要PODとの連携に対応している。ジョブチケットで出力条件を指定できるので、印刷直前にオフセットからPODに、デバイスを変更することができる。



「デジタルがもたらす価値」を提案  
(日本ヒューレット・パッカー)

展示した印刷サンプルでは、デジタル印刷機は従来のオフセット印刷を代替するものではなく、独自の領域を確立していくという認識のもとに、付加価値による差別化が図れる実例を示した。

昨年のJGAS2009で発表した「TruePressJetシリーズ」の印刷サンプルなどを紹介。デジタルとオフセットの融合的な事例を示した。戦略的なビジネスモデルがないと、デジタル印刷を採算ベースにのせることは難しい。メーカー側からシステムの戦略的な活用を提案していく必要がある。

高速インクジェットは品質が向上し、クオリティが高い小ロット印刷物、たとえばDMの印刷などに使われるケースが増えている。また、それほど高い品質は求められないが、ロットの大きな印刷物であってもPOPのように、バリエーション印刷が力を発揮するケースがある。

産業用途では、高精細な印刷が可能であることから、自動車メーターパネルのように従来はスクリーン印刷の領域であったものがシフトしているケースもある。

### ■各社のコラボレーションが盛んに

富士フィルムグラフィックシステムズは、機能を拡張した次世代ハイブリッドワークフローシステム「FUJIFILM WORKFLOW XMF」、またページ単位でのデータ入稿を効率化するWebポータルサイトシステム「XMF Remote」を中心に紹介した。

「FUJIFILM WORKFLOW XMF」は、ひとつのジョブに表紙、中身、折込チラシなどを設定できる。さらに面付けエンジンを統合し、オフセット印刷、デジタル印刷に必要な面付けに速やかに切り替えられる。これにより、面付け工程が効率化される。

今回は「FUJIFILM WORKFLOW XMF」内で管理しているCTP面付けデータをワンクリックで自動的にJDF+PDFに分割し、富士ゼロックス「700Digital Color Press」で東見本ブループレスを出力するハイブリッドワークフローを提案した。

さらに、JDFによるポストプレスとの自動化、省力化が可能なることから、「FUJIFILM WORKFLOW XMF」の面付け情報、折情報など、どのようなデータを後加工に渡すことができるかを紹介した。

「XMF Remote」によるJDF

連携として、データの一元管理、Web上での校正、検版などが行われた。

三菱製紙は、さらに機能アップしたワークフロー「ディアリブレ」の特長を紹介。また、FACILIS EZによる面付けから出力、カットワークまでのPOP制作ワークフローを実演した。コンパクト&Ecoを追求した完全プロセスレスCTP「サーマルディジプレートシステム・TDP-459」とインクジェット複合機「EdgeLine」による出力デモが行われた。

ハイブリッド印刷への応用として、デジタルによるモノクロ印刷と、オフセットによるカラー印刷などが考えられる。本文モノクロ印刷、表紙カラー印刷といったケースで、こうした処理が可能になる。

コニカミノルタグラフィックイメーシングは、「受注から増注への原動力」をコンセプトに、デジタル印刷とオフセット印刷のハイブリッド対応を可能にする提案を行った。

カラーレーザープリンター「Pagemaster Pro5500N」は、カンパ出力から高品位なオンデマンド高速印刷のエントリーモデルとして、本格稼働を提案。また、JDF対応により、デジタル印刷とオフセット印刷のハイブリッド対応を可能にする。

ビジュアル・プロセッシング・ジャパンは、生産工程を統合する新世代サーバベースITソリューションとして提案。PODパッケージソリューション、プリプレスサーバ、Web型オンラインコラボレーションポータルを組み合わせて、デジタル入稿からの工程を管理。デジタル印刷、オフセット印刷、Webへの活用へ導く。

大日本スクリーン製造とのコラボレーションにより、Press-sense iWayとTrueflow新バージョンと連携し、データを活かすソリューション、顧客ごとにフィットしたシステム構築に取り組んでいる。



次世代ハイブリッドワークフローの機能を紹介  
(富士フィルムグラフィックシステムズ)

### レポート発行・制作著作

株式会社印刷出版研究所  
本社・東京都新宿区早稲田鶴巻町534番地  
TEL 03-5155-7925/FAX 03-5155-7930  
支社・大阪市北区東天満2-9-4  
TEL 06-6353-4866/FAX 06-6353-4944  
[URL]http://www.print-info.co.jp/

※本レポートの商用利用を目的とした無断転載および2次利用を禁じます